

新約聖書の福音書の中で一番初めに書かれたのはマルコによる福音書であると言われております。紀元六十年から七十年の頃です。それより遅れること約十年、マタイによる福音書とルカによる福音書が書かれました。この二つの福音書はマルコによる福音書を参考にしながら書かれた福音書であると言われております。従って書かれたのは約七十年から八十年になります。この時間の差から私たちは福音書の著者の意図を知ることが出来ます。

本日の福音書を見てみますと、一人の王子の、披露宴の譬え話が選ばれております。このところ毎週続けて私たちは天国の譬え話を学んでおりますが、本日も今までと同様であります。すなわち家来達は主なる神より遣わされていた預言者達です。預言者達は、主なる神によって最初に義とされたアブラハムの子孫であるから天国の座が約束されているのではなく、主なる神のみ心にかなう業をなさなければ天国にはいることは出来ない與人々に告げ知らせしていたのですが、結局耳を傾ける人は極く僅かでした。そして人々はある時は戦争に負け、ある時は大きな審きを受け、ある時は他国に滅ぼされたりしたのでした。マタイはこうした歴史を持つユダヤの人々に対してこのマタイによる福音書を書き記しましたので、ユダヤの人達の悔い改めが何よりの目的でした。主イエスが地中海沿岸の国々にも宣べ伝えられ、信じる人々が増えてきておりました。十数年前にはローマで大迫害が行われ、多くの人々が殉教しました。キリスト教がユダヤだけでなく、全ての国々でも根付いているのは明らかでした。それなのに肝心のユダヤ人はどうだろう。最終的には主イエスを殺してしまった。主イエスが説かれた道から一番遠い民族になってしまった。このままでは主なる神が選ばれたはずのユダヤ人の救いが、世界で一番後になってしまう。マタイはそう考えていたのでした。そして紀元七十年、ユダヤの首都エルサレムに大変な出来事が起こりました。ローマ帝国が攻めてきたのです。ユダヤもローマの巨大な力にかなうはずもなく、ついにエルサレムは陥落しました。主イエスが天にお帰りになってから約四十年後のことでした。マタイは、これは旧約聖書の時と同様に、人々が悔い改めないために下された主なる神の審きであると考え、この例え話の中でそのことを加えております。それが七節にありました、『そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った』です。この箇所だけ、他のところとつながらない感じがしますが、それはこのような理由でマタイが意図的に付け加えたものだからです。マタイはこのように歴史の中で起きた事実の中に主なる神の御心を見出し、人々を主

なる神の元に立ち返らせようとしたのです。

このようなわけですので、マタイは主なる神から離れた人、主なる神から遠ざかっている人に対して特に主なる神の愛を語っております。マタイにとって最大の喜びは、主なる神から離れている人達が、一人でも多く立ち返ることだったからです。そしてそこに記されているのは、主なる神に従わないと言うことは、審きではなく主なる神の恵みの拒否そのものであるということなのです。先ほどの譬えを見てみましょう。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』。主なる神に従うのは犠牲ではなく招きであることが示されています。そして招きに応じなかった人々は確かに罰せられましたが、一番マタイが言いたかったことは、招きに応じないと罰せられるということではなく、主なる神の婚宴にあずかれなかったということなのです。すなわち天国の座が約束され、招かれていながらあずかることができなかった、『そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう』。ということだったのです。

私たち人間が日頃に忙しさに心を奪われ、永遠のことを忘れてたり、この世の要求に耳を傾けて静かな声で呼びかけるキリストの招きを聞き逃してはいないか、一番よいものはわかっていながら、二番目以降のものを重んじて一番大切な存在を阻止させたりはしていないか。主なる神が、私たち人間が天国にはいるのにふさわしくない者であることを御存知でいながら、私たちを招かれるのは何故か。マタイはそのように語り、主なる神の愛の大きさを示しているのです。私たちも自分の存在を心に留めて見ましょう。主なる神を悲しませたことが何回あることか、そして今でも忍耐させ続けていることがあるのではないか、それでも主なる神は私たちを招かれるのです。その招きを最終的に拒否することのないように、私たちの信仰生活を振り返ってみましょう。